

**グランプリ受賞者に  
疑問↓分析↓納得↓祝福**

「突き、一本！」

3月1日から3日間、本誌読者の会、第2回全国大会が行われた。昨年の参加者から面白いと聞いていたので、今回勉強のため出かけた。期待したのは、どのような方たちが集まり、全国のどのような成功例が聞けるかということ。事実、本誌の特徴である左翼から右翼、もちろんオカルトあり話を初デートの時の気持ちで心ワクワクさせて拝聴することになった。

冒頭の「突き、一本！」は最終日に行なわれた、A1グランプリにおいて100万円の賞金を獲得した鹿児島県の坂上隆さんが剣道7段であり、正面から戦う潔さに勝利したことから称賛を込めたお祝いの言葉である。

彼は「サイロール」という自社ブランドである良質なサイレージをロールベールにして、つまり付加価値を付けて販売している。

この南九州地域においてコーンの栽培はおろか、良質なサイレージの購入となると極端な場合、東北か北海道からの購入をしなければならぬが、坂上さんはそこにビジネスチャンスを見つけたのだ。

本当は意地悪に「小手先、一本！」

にしようかと考えたが、冗談の分かる坂上さんは許してくれても、彼のマーケットがこの言葉のエックスキューズを許さないだろう。

一昨年の11月、読者の会のセミナーで彼の仕事を聞く機会があった。正直なところ、何がすごいんだ？ 北海道のそこそこの酪農家はやっていることなのに鹿児島ではやっていないのか？ そうなんです。坂上さんの高品質のロールを購入する畜産関係者は、怠け者が多いと感じてしまったのです。つまり鹿児島各畜産農家の努力が足りないということなんです。そのような、その日暮らしの畜産農家と商売してプ

ライドはないのだろうかと思っただけ、北海道のような絶対的な土地がない環境の下で、鹿児島のように畜産が繁栄している地域性を考えれば、高品質の餌の供給が急務となるのは当然とも思える。

坂上さんのビジネスセンスは素晴らしい、そして正しいのだが、意地

**Vol.14 春宵一刻値千金**



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

悪で言いたかった小手先の良い意味である「チョットした機転」から生まれた需要と供給の問題を是正する産業と思想。また、農政に乗っかって、100ha分の転作の産地つくり交付金をせしめて

いるこの私と、怠け者の九州の畜産農家に囲まれてそれで儲ける坂上さん、とどちらが**悪徳農民**なのだろうか？ とも考えさせられた。

**オレにも  
言わせる!**

**北海道長沼発  
ヒール宮井の憎まれ口通信**

ともかく、彼のような成功する農業生産者は少ない、正しくはほとんど現れない。本来は競争社会であるべきなのに、この日出づる国、日本で見本、手本となる農業もビジネス、つまり儲けてなんぼの世界であることを、ご教示していただける教祖は指の数もいなのが現実だ。競争社会では能力や技術を持った者がその社会の上位に行けることに問題はないが、周りを見渡すと「下を見てもきりがない」状態も事実だ。

であるので、坂上さんが鹿児島で頑張っていることに文句はないが、ライバルとしては脅威の存在なので、同じ道場(農業)で戦う時に、私は小刀を隠し持って二刀流でアソビに戦いたい。

参加当日、坂上さんは松葉杖を使ってプレゼンを行っていたのでご本人に「儲かり過ぎて痛風になったの？」と質問したら「ちよっとだけ」と答えた。これだけ薩摩男子をヨイショしておけば、今度あったら銀座に招待していただけるだろう。

3月2日には今回、一番興味があった、青森県の木村慎一さんのウクライナ大豆栽培と沿海州農業についての話があった。沿海州では、中国系の農家がコメ作りをし、ニュージランド人も頑張っているという。報告の冒頭で、実は木村さんは結論

を先に発言されたのだった。「結局この土地は誰の物でもない」。日本人が開発すれば未来が開けると言うイメージの話だったが、あのロシア人のことだ、いつまで経っても、出される結論は変わらないだろう。これ以上、言うとも再び銀座に連れて行ってもらえなくなるので止めるが、次回の現地ツアーには是非参加してスパシーバ、ハラシヨおねうちやんに会いたいのも本音である。

### 稲川淳二ほどでは ありませんが……

その様な面白いような、予定どおりのちよっと変わった方々の中で一番印象的で正統派の出会いがあった。それは「お化け」である。以下は自分が経験した本当の怖くない話である。宿泊は近くのチサ○ホテルの800号室で起きた。3日の午後、高橋がなりさんから昼食をおごっていたとき、都内某所にレクサス・ハイブリッドで送っていた。その後、所用も済み、関係者との会食のあと、ホテルに着きシャワーを浴びて23時にはベッドに入り込んだ。朝の3時ころ頭の右上部後方でドアが「キー、キー」と鳴り出した。バスルームからは離れた音だったので、違いはすぐに分かり、はつきりと目が覚めたが、かまっ

いられないので無視したらまた「キー、キー」と鳴り出した。私は眠たいので「静かにしてくれ」と言うと言はなくなったが、日の出頃に「もう一度だけ同じ現象が起きた。もう朝だから寝たら？」と言うとまた静かになった。

① 1987年6月に初めてお化けを見た。米国、ミネソタ州、ミネアポリス北西のコンファートインの出来事だった。私はエマーゼンシーを考えてホテルのドアの明かりはいつも付けておくようにしている。夜中ドアが開く音で目がさめると目の前の鏡に山高帽の男性の影がスーッと現れドアの方に動き出し、出て行った。その初めてのことにほったを叩いたりしたが、夢ではない現象に本当であれば驚くはずの自分がいたって冷静に対応していた。

② 1993年12月の帯広、東○インのフロントでは、あのムネオさん(鈴木宗男衆院議員)がタクシーに乗り込む後援者が見えなくなるまで深々と頭を下げ続けていた。**私と同じで**イメージとかなり違う人だと感じた。夜に就眠につくとスリッパをはいた(多分)女性が「スッ、スッ、スー」と私のベッドの近くまでやってくる音が聞こえた。眠い私は「寝させてくれ」と言うと言は

なくなった。  
③ 2000年のある秋の夕方に札幌に行く用事があり、車で交差点を左に向けた先の畑では近所の農家がトラクター作業をしていた。「あれ、夕暮れなのにトラクターの影が見えない」と気付いた。翌日、彼の家に電話をして「何かあったら手伝うよ」とトンチンカンな電話をした2日後に彼はトラクター事故で他界した。  
④ 本年正月が明け、子供たちを札幌まで送った帰りに、寄り道をして、ある交差点を左に切った。「そう言えばこの交差点の排水路で首つりがあったな」と思った瞬間、4輪駆動のカマリのコーナーセンサーが「右前方注意」と知らせてきた。

最後のトヨタの音声案内を除き、物理的な現象ではなく、脳がそのような音や画像を作り上げているのだというのは理解できているので、気にはしていないが、自分にとってこの様な現象が起きた年から数年間は、**劇的な変化**がある。米国人との出合いで農機具の直接取引、その後の劇的な取引額の増加、組換え大豆栽培などがあった。  
さて今年ほどのような変化があるのか楽しみである。選択ができるのであれば加齢臭漂うオヤジ連中ももう飽きたと発言したら、お化けに怒られるだろうか。